



田原市図書館20周年記念

地域に

根差した

協力での

図書館づくり

一人の署名から始まった新図書館建設への道のり

図書館フレンズ田原



刊行のことば

田原市中央図書館は、昨年、開館20周年を迎えました。その前年、明治大学の青柳英治教授より、田原町図書館の建設にあたり、市民（特に図書館フレンズ田原）が図書館づくりに関わりを深めたことを書いてほしいと原稿依頼がありました。そして出版された書籍『市民とつくる図書館』（勉誠出版）には、最近建築された全国の優れた図書館の事例と並んで、20年前に建設された田原の事例が収録されました。少子高齢化や厳しい財政状況を迎えつつある今、従来の行政主導ではなく市民が積極的に参画し、協働でのまちづくりを進めて行くことが期待されています。田原町の図書館づくりはその先例とも言えるでしょう。今こそ、当時の活動を広く市民の皆様を知ってもらいたいとの思いを持つ方々のご尽力があり、このたび本書が刊行されることになりました。本書を通じて、良い図書館を作るために、当時、多くの人がいかに尽くされたのか、その成り立ちが再認識され、今後の田原市のさらなる発展に役立つ契機と

なることを願っております。

最後になりましたが、本書の出版にあたり、田原ロータリークラブ及び株式会社あつまるタウン田原の多大な御協力に対し、厚く御礼申し上げますと共に、編集を手掛けてくださった「a0もの」の中村晋也様、貴重な資料をご提供いただいたNPO法人たはら広場の小澤美穂子様感謝申し上げます。

2023年6月

田原市図書館 館長 是住 久美子

2022年8月2日、田原市中央図書館が開館20周年を迎えた。市民が待ち望んでいた図書館が田原の地に誕生し、20年の年月を重ねた。3日前の7月30日には、「お誕生日会」が中央図書館に隣接する市文化会館アトリウムで開催された。節目を祝おうと、長年、図書館を支えてきた市民ボランティア「おおきなかぶ」が主催。世の中は2年前から新型コロナウイルス禍にあり、盛大な記念行事とはいかなかったが、会場は集まった人たちの温かな気持ち、お祝いムードにあふれていた。「リサイクル・ブック・オフィス」（NPO法人たはら広場が運営）の売上金を活用した大活字本39冊、館内の授乳室に掛けるため図書館で活動する市民グループ「ハンドの会」が作った暖簾。記念の贈り物をそれぞれの代表者が、是住久美子館長に手渡した。

誕生日会はプレゼントだけでなく、田原市の元音楽教諭の女性が会場に飾られたロード・モネの「睡蓮」など複製画の解説と音楽を融合させたパフォーマンスも披露。記念の催しに花を添え、すべて市民らの手で行われた。

「誕生日会を開いてもらえる図書館は全国でも数えるほどこがなく、幸せです」。この日、市民から20周年を祝福された是住館長は、こう感謝の言葉を述べ、「市民ボランティアの皆さんが支えてくれ、ここまでこられました。生活になくってはならない図書館に努めていきます」と続けた。

市民が開いた20周年の「お誕生日会」



図書館がなかった旧田原町。「私たちの図書館がほしい」と町民が声を上げ、行政側が図書館建設の計画段階から情報を公開、町民と行政が意見を交わしながら図書館づくりが進められた。2000年前後、公共施設の建設に住民の意見を聞き、反映させることがまだ少なかった頃で、住民と行政が手を携え、誕生した田原市中央図書館。開館20年にあたり、図書館づくりの胎動から誕生までの過程をひも解く。

2003年の田原市発足と図書館の現況

愛知県の最南端、渥美半島に位置する田原市は、南は雄大な太平洋、北は波穏やかな三河湾、西は伊勢湾と三方を海に囲まれている。半島のほぼ全域が市域にあたり、広さ191・11平方キロメートル（2021年1月1日現在、国土地理院調べ）。人口は5万9229人（23年3月31日現在）。

かつて渥美郡田原、赤羽根、渥美の3町があったが、ちょうど田原町図書館が開館した翌年の2003年8月20日、平成の大合併により、田原町が赤羽根町を編入合併し、市制を施行、田原市が誕生した。その2年後、10月1日に渥美町を編入合併し、新「田原市」が発足、渥美半島は一つとなった。

田原市役所



田原町図書館の建設は、合併以前、市制施行前の旧田原町時代にさかのぼる。昭和時代の1983年、文化会館に広さ160平方メートルの図書室が設置された。蔵書2万5000冊余の小さな図書室。その後、図書館建設は町の懸案にもなり、一時は中心市街地の再開発計画の中に盛り込まれたこともあったが、1996年、田原町のまちづくりの指針「第4次田原町総合計画」に蔵書10万冊以上を備えた図書館の整備を促進する方針が盛り込まれた。同年11月には、図書館建設構想委員会が延床面積4000平方メートル、蔵書35万冊、年間購入冊数2万2000冊などとする検討結果を町側に答申した。

これを受け、町は図書館建設計画を進め、2002年8月2日、田原町図書館が開館した。翌年の田原、赤羽根両町の合併で田原市が発足したことから、田原市中央図書館に改称され、赤羽根町図書館は田原市赤羽根図書館（分館）となった。図書館開館前に巡回を始めていた移動図書館「いずみ号」は、田原地区に加え、赤羽根地区に

も巡回するようになった。

2年後、田原市と渥美町の合併により、渥美町図書館は田原市渥美図書館に改称。移動図書館「やしの実号」が、渥美地区で巡回を始めた。これで現在の田原市図書館のかたちが整った。

田原市中央図書館



渥美半島図



三つの図書館の概要

中央図書館は3階建てで、田原文化会館、総合体育館との複合施設になっている。35万冊の蔵書が可能。2021年度で30万5300冊を所蔵する。

21年度の利用状況を見ると、入館者数は18万6743人で、利用者数は10万4777人、貸出点数は51万1269点だった。いずれもコロナ禍で20年度を底に落ち込んでいたが、回復傾向となっている。

赤羽根図書館は、赤羽根文化会館の2階に併設、一般室と「こどもしつ」に分かれ、3万9153冊（21年度）を所蔵する。また、渥美図書館は渥美文化会館と併設し、1階は一般室と「こどもしつ」、2階は学習室、ティーンズコーナー。21年度で14万4964冊を所蔵する。

渥美図書館



1 町民主導の図書館建設運動

(1) 遅れていた田原町の図書館建設

好景気バブル期の末期とはいえ、まだバブルのかおりが色濃く残る平成初期の1991年、人口3万4000人余りの地方のまち田原町でも、中心市街地の渥美線三河田原駅に近い地区で再開発計画や、中心街にあった渥美半島の基幹病院、渥美病院の移転など大規模事業が検討されていた。

当時、町の懸案事項の一つが図書館建設だった。町内には、1983年に整備された広さ160平方メートル、蔵書約2万5000冊の小さな「図書室」しかなかった。この年、田原中央地区市街地再開発基本設計が示され、再開発ビルの公共スペース部分の

一部に約1300平方メートルの図書館を整備することが盛り込まれた。町として初めての図書館建設だった。

渥美半島にあった渥美郡3町のうち、隣の赤羽根町で1992年、渥美町では1994年に図書館が建設された。農業に加え、トヨタ自動車など三河湾臨海部の工業用地に進出した企業により、3町で最も財政力が豊かで人口も多い田原町だったが、図書館建設では遅れをとっていた。しかし、市街地再開発基本設計に建設が記され、市議員が先進地、佐賀県伊万里市の図書館を視察するなど、町内は図書館建設への機運が高まっていた。

(2) たった1人の署名活動から始まる

1992年夏、渥美線三河田原駅前図書館建設を求める署名活動を行っていた1

人の女性がいた。女性は、留学先の米国カンザスシティでパブリックライブラリーの分館プラザライブラリーに通い、多くの人がいろいろな目的で図書館を利用している姿を目にしていた。日本とアメリカの文化施設に対する考え方の違いを感じて帰国。田原町にも図書館が必要だと考え、行動を起こしていた。

この年、女性は「よい図書館を創る会」（以下創る会）を立ち上げた。田原町が図書館整備へと動き出したことを受け、創る会は町民が望む図書館づくりへの参加を住民らに呼びかけていた。配布していたチラシには、図書館について「地域住民が最も利用しやすい文化施設のひとつです。年齢を問わず、自発的に気軽に活用できるところです。また、地域住環境整備の面では、コミュニティー・アメニティーなどの向上の役割を果たす、目に見えない私たちの財産に値するところです」と書かれ、図書館への期待がにじんでいた。

創る会は、町内で同じ頃活動していた子育て支援グループ「くぬぎの会」のメンバ

ーと活動を開始した。くぬぎの会は、子育て中の主婦らからなり、田原児童館を拠点に活動していた。小学校PTAやPTAのOBらも巻き込んで創る会の活動を支援し、図書館建設を求めるメンバーを増やしていった。

くぬぎの会は1994

年、碧南市立図書館などの図書館見学会を独自に開催し、見学記として「楽しさって文化なんだ」を発行した。学んだことを広く共有するためだった。

「よい図書館を創る会」

図書館について考えたことがありますか？
現在、わたしたちの町、田原では、図書館のない町から図書館がある町へと動いています。そして、図書館を次のように計画中です。

場所	：市街地開発ビル 内4階		
規模	：1,700㎡		
建設計画	平成 4 年	—	設計
	〃 5～6 年	—	整備
蔵書数予定	平成 5 年	—	2万冊増
	〃 6 年	—	〃 増
合計	5～6万冊の蔵書予定		

※ 田原町役場社会教育課より

図書館は、地域住民が最も利用しやすい文化施設のひとつです。年齢を問わず、自発的に気軽に活用できることです。また、地域住環境整備の面では、コミュニティー・アメニティーなどの向上の役割を果たす、目に見えない私たちの財産に値するところです。

上記のみの計画概要から、利用するわたしたちの意向というものが、まだ反映することが出来るものと考えます。したがって、わたしたち利用する人々によって、良い図書館を創ることが出来るのではないのでしょうか？これは、私個人の意見かもしれません。

そこで、図書館に対するイメージ、具体的なアイデア、要望また質問を皆様から集めることから始めて行こうと考えています。出来るだけ多くの人々の参加によって、私たち田原町民が望んでいる良い図書館創りに参加してみませんか？ご連絡をお待ちしています。

※ご意見、ご希望がありましたら裏面に自由に書いて下さい、また、関心のある方は御名前だけでも結縛です。多数の方の参加を希望します。

連絡先：「よい図書館を創る会」

(代表者 神本 浩子)

(3) 「図書館フレンズ田原」が活動を開始

再開発ビルに初めて図書館建設が示された1991年から5年後の1996年。田原町は、まちづくりの指針となる第4次町総合計画に「蔵書10万冊以上を備えた図書館の整備を促進する」との方針を盛り込み、図書館建設構想委員会（以下構想委員会）を設けた。「くぬぎの会」のメンバー1人が、この委員会に入り、図書館建設に向けた検討が本格的に始まった。

7月には、図書館運営に詳しい慶應義塾大学教授の糸賀雅児氏を講師に迎え、担当課だった町生涯学習課主催で講演会「本と仲良くなるために」が町内で開催された。くぬぎの会が町役場に働きかけて実現した。11月には、構想委員会が「延床面積4000平方メートル、蔵書冊数35万冊、職員15人程度の図書館が望ましい」とすることを町側に答申した。

くぬぎの会は、翌年の97年にも、再び糸賀氏から図書館について学ぶ機会をつくった。出張の際、隣町の豊橋に立ち寄ってもらい、住民が主催する「糸賀先生の話を聞く会」に迎えた。住民や議員ら約30人が豊橋に集まった。

そして、秋深まる11月、住民の図書館建設への思いも熟し、くぬぎの会の女性メンバーや企業図書館で司書経験があった女性、田原女性会議の女性らを中心に新たなグループ「図書館フレンズ田原」（以下フレンズ）が誕生した。



フレンズは、図書館のことを学び、まちにできる新しい図書館をよくしていきたいという思いに賛同した町民のグループ。会則には「この会は、田原町立図書館(仮称)の建設画中、建設中、また建築後も図書館利用者の立場から行政と協働して図書館づくりを行っていくことを目的とする」と記された。名称の「フレンズ」は、佐賀県伊万里市で市民が積極的に図書館運営に関わり、活動していた「図書館フレンズいま」にあやかった。

町民の図書館への関心を高めることや、田原町の情報をすみやかにできるだけ多くの人に伝えること、活動を報告する連絡紙(会報)の発行などを主な活動にした。

一方、まちづくりに深くかかわっていた関係則氏や椿実治郎氏、安田幸雄氏ら町会議員の中には、自宅の2階をフレンズの会議場所として提供するなど、図書館建設を目指して活動する女性たちを支援する議員もいた。こうしたことが、後に町民と行政、設計者の3者協働による図書館づくりに好影響を及ぼすことになる。

2 町民参加で図書館建設計画づくりスタート

(1) 1998年3月、町が基本計画を発表

田原町は1998年3月、「田原町図書館及び生涯学習施設建設基本計画」(以下基本計画)を発表した。基本計画には、コンセプトや候補地、規模のほか、図書館や生涯学習センターを併設した複合施設を目指すことなどが示された。しかし、それは構想委員会が答申した内容に合ったものではなかった。このため、フレন্ズには、基本計画に不備や矛盾があることを指摘する町民の声も届いた。それから半年がたった10月ごろ、町議の1人から基本計画の決定が近いことがフレন্ズに知らされた。

フレন্ズはすぐに会合を開き、町生涯学習課の課長補佐から基本計画案について説

明を受け、意見交換をした。町議も出席し、補足説明した。11月には3回の夜間ミーティングを重ね、町に提出する要望書を準備し始めた。基本計画案の内容に理解を深めるとともに、図書館建設のこれまでの動きをおさらいし、立地についての考察などを踏まえ、要望書を提出することを決めた。署名集めにあたっては、丁寧に説明することをメンバー間で確認している。

(2) 計画に対する要望書をフレンズが提出

11月25日、フレンズの代表ら会員3人が町役場を訪れ、395人の署名簿を添えた要望書を白井孝市町長や町議会議長、教育長に提出した。

要望書では、他の目的を持った施設との兼用部分をなくすこと▽緑化空間を確保し、潤いある施設とすること▽計画づくりや建設過程で町民に情報を公開する▽図書館

づくりの見識者をアドバイザーとして採用▽図書館利用などに関する町民への啓発活動を推進するーなどを提案した。

提出したメンバーらは「図書館こそ、まちづくりの核。皆に親しまれる図書館を考えている395人の純粋な気持ち、行政に伝われば」と話していた。

提出後、395人の署名者には直接礼状を手渡しして報告した。要望書を提出したことは新聞でも報道され、大きな反響があったという。町民の図書館への期待感は大

フレンズが提出した要望書の一部

2. 他の目的を持った施設との兼用部分を持つと、図書館にあるべき自由な雰囲気は失われ、また同時にお互いの独自性も相殺される。

原則的に図書館は、独自の機能と役割を持ち、運営上もサービスの為、時間延長や夜間貸し出しに対応する事が必要になる場合等、図書館独自の活動に、その度対応して管理ができるかが、疑問です。複合施設設置の場合においても、“同一敷地内に隣接し、他の目的をもった施設がつくられることはあってもよい”(以上平成8年答申より)とする考え方から大きくはずれてしまう。

3. 基本計画書における複合施設計画では、完成時点で敷地に余地は見られず、計画書冒頭の“将来にわたり機能する”目的や、“変化にフレキシブルに対応できる施設”だ、との計画が達成できない。

4. 予定された場所では、駐車スペースの確保が優先され、緑化部分が減少し、計画書冒頭の“うるおいのある施設”と成り得るの不安である。“屋外で本が読める図書館を”との私達の希望は、取り入れられる余地が全くなさそうだと判断せざるを得ない。

また、今後の進め方として、以下の二点について提案したい。

参考までに付記させて頂き、実現できるように希望します。

①. 図書館建設についての情報の公開を行い、また継続的に啓発活動を推進して欲しい。

多くの住民による図書館の活用を見込んで、今から図書館に対する興味を持ってもらうことを目標に、例えば、

- (1). 図書館建設の経過報告会をする。
- (2). 図書館サービスとその利用に関する説明会又は講演会を開く。

②. 図書館づくりの最初の段階から、又はできるだけ早期より、経験豊かなプロのアドバイザー又はリーダーを置いて欲しい。

図書館で最も重要な要素は、人(職員)と施設と資料だと言われています。特に設計、建設業者、議会や建設委員会との兼ね合いも含んだ、全般に対する正しい知識と見識をもつて、直接図書館づくりの計画段階から図書館づくりにかかわる事が不可欠です。

以上。

平成10年

図書館フレンズ田原

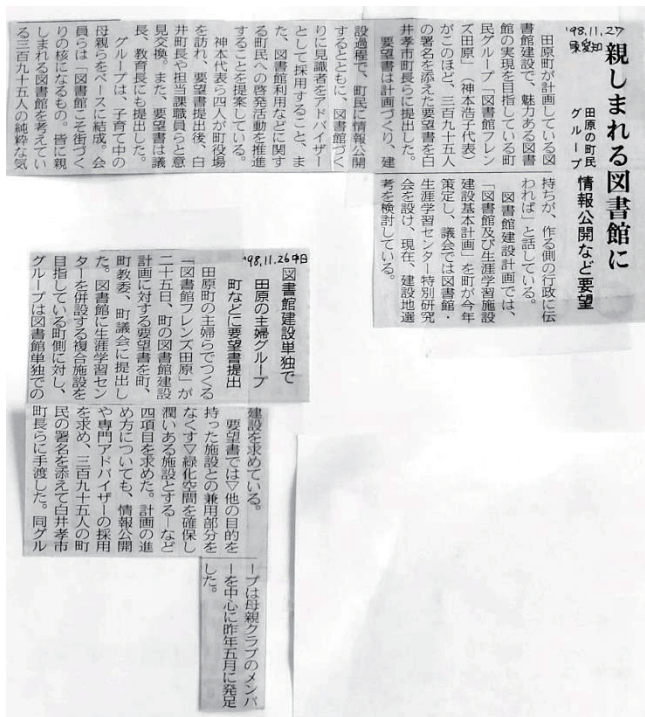
く、町内に住む元小学校長の男性が地元の新聞に寄せていた原稿からも分かる。要望書提出の数日前、「図書館がほしい」のタイトルで掲載された。

「なにも聳（そび）えるようなコンクリートの殿堂を造らなくてもよい。町の身の丈に合った、誰にもやさしく利用しやすい図書館を造ればよい。内部は木造もいいな。そんなに大きくはなくても、情報・資料のいっぱい詰まったものを考えればいい。もちろん、図書館だから本が中心であるが、雑誌も新聞も、ビデオソフトもCDもと幅広い資料を提供してくれる場でありたい。それから、インターネットで世界の情報や学習資料を得られるような機能も、当然備えたいものだ」

要望書提出時、フレンズのメンバーは、白井町長が立腹していたと感じていたが、後に伊万里市民図書館の視察をきっかけに自身の考えが変わっていったのではないかと認識している。以降、担当課の町生涯学習課もフレンズを重視し、フレンズが発案する企画を検討課題にするなど、町民の意見を建設計画に反映させるようになっていった。

【新聞記事】中日 1998年11月26日付

東愛知 1998年11月27日付



(3) 専門家を講師に講演会

年が明けた1999年1月から、フレンズは月例会を昼と夜に2回開くことにした。仕事を持っているメンバーもいたため、昼間に活動方針を話し合ったり、活動報告をしたりする月例会に参加しにくい人たちもいたからだ。2月には、町生涯学習課に提案し、公立図書館づくりに関わっている図書館計画施設研究所の菅原峻氏を講師に講演会「図書館はわたしの友だち―21世紀におけることのできる図書館を」を開いた。町の主催でフレンズが協力し、フレンズのメンバーは企画や当日の運営にも積極的に参加した。講演会の前には隣の渥美町、赤羽根町の図書館を見学するバスツアーも開催した。

また、フレンズは、講演会を通して望んでいることを事前に確認した。

1 図書館のない町から図書館のある町に変わることの素晴らしさを理解し合う

- 2 図書館づくりは町づくりに結びつくという発想を育てたい
- 3 住民による図書館づくりの重要性
- 4 フレンドの組織力を高め、1999年度に設置予定の図書館準備委員会に向けて発信力を育てたい


講演会の当日、会場には約80人が集まった。菅原氏は、図書館の姿として、暮らしに役立つ▽町の将来を考えるのに欠かせない町の頭脳▽町の文化(町民の生きざま)を継承し、新しい文化の誕生の場になる▽誰でも利用できる図書館こそが地域の核、求心力になる―と説明した。

ゆたかな時間のなかで
出逢いが生まれ
未来が育ち
ほんとうの文化が實をひろげ始める

21世紀に 贈ることのできる 図書館を
すが おら たかし

菅原峻講演会

プロフィール
図書館計画施設研究所所長。
全国の図書館づくりの得がたい相談役として、活動を行っている。
佐賀県伊万里市立図書館、静岡県磐田市立図書館、福岡県刈田町立図書館、愛知県岡崎市立図書館等多数の図書館建設計画に参加しています。



日時：平成11年2月19日(金)
午後7時～8時30分 (午後6時30分開場)
場所：葦山会館・松の間
入場無料(直接会場へお入りください)
主催：田原町教育委員会 協力：図書館フレンド田原

裏面必見

その上で「こうしたことを支えるのは、図書館の資料と情報。これらをいつでも役立つ状態にしておくことのできる司書、専門的な教育と経験のある館長が必要」とし、「図書館の主人は住民。住民1人1人が図書館に関わり続けてほしい」と呼びかけ、魅力ある図書館の実現には住民の姿勢にかかっていることを説いた。

検討が進んでいた建設場所、複合施設については「1人でも多くの町民が利用しやすい場所が望ましい。複合施設はさまざまな例があるが、図書館としての計画をしっかり作り、設計にも町民が関心を持つべき」と助言した。公共施設の設計段階から住民が関心を持つというのは当時、まだ少なく、フレンズや町民にとっては貴重なアドバイスになった。

会場では、参加者の半分以上、45人がアンケートに応じ「町の顔となるような図書館が欲しいです。図書館はオアシスです」「図書館の今後の方向、あるべき姿、望ましい姿がみえてきました」などの率直な感想、意見を寄せた。

参加者の中から22人がフレンズの活動にわり、会員はその年の6月には77人に達し、カ
ンパなどの協力者も含めると多くの町民がフ
レンズの活動を支援していた。講演後も、菅原
氏は町に設計の助言をしたり、フレンズの月例
会に参加したりするなど、図書館建設への協力
を続けた。

本日の講演会プログラム


PM 7:00~7:10 あいさつ

7:10~8:30 講演

8:30~9:15 質疑応答

菅原峻プロフィール

図書館計画施設研究所所長。1953～78 日本図書館協会に勤務。78、4月独立して図書館計画施設研究所を創設。各地の図書館計画や図書館建設(設計)のコンサルタントをし、多くの優れた図書館の誕生に手を貸して来た。また図書館つくらせ運動からつくる運動への転皮をよびかけ、情報誌「としよかん」を季刊で発行し、全国の住民の相談相手になっている。佐賀県伊万里市立図書館、静岡県磐田中立図書館、福岡県田町立図書館、愛知県岡崎市立図書館等多数の図書館建設計画に参画しています。



伊万里市民図書館

菅原さんの説かれる、みんなが力を、知恵を出しあつての『図書館つくらせ運動からつくる運動への転皮』とは何でしょう、どうしたら私達の町、田原町で『図書館のある暮らし』ができる様になるでしょうか、菅原さんのお話のなから、なにが1つ良い方法、良いヒントをみつけて下さい。

図書館はわたしの友だち

—21世紀におくことのできる図書館を—

菅原峻 (図書館計画施設研究所所長)
1999. 2.19 長瀬町民会館

- 1) 図書館ってなんだろ
 - ①図書館は、国を認むたり、本を読むだけでは学べない
 - ②図書館は本の蔵(一書)を認んで集め、蔵らしの知恵を認る
 - ③読者の目線になる
 - ④文化を解き、育て、次代に引き継ぐ
 - ⑤地域の基本施設(町民の求心の力)となる
 - ⑥図書館は生涯学習施設そのもの
- 2) 図書館の未来は輝くでしょう
 - ①図書館必要とし、作り、使い、育ててきたのは日本
 - ②生涯にわたる本を学ぶのつぎ
 - ③市民の生涯学習施設
 - ④図書館の評価は21世紀にあり
- 3) コリヤは図書館づくりは始まるよ
 - ①図書館がある→図書館は?
 - ②計画をしっかりとくる
 - ③優れた建築家を得る
 - ④計画書という生体の上で図書館員と建築家が真利連携をする
 - ⑤計画、建設に町民がしっかり関わる
- 4) 田原町に図書館が生まれたら
 - ①年数の町民が本を借りる→4万人×0.5×20冊=40万冊(1町)
 - ②町民平均10冊民が読書→町民1000人×10冊=100万冊
 - ③町民1人への読書0.6冊の町民の図書館に100冊
 - ④町民1人への読書1.700冊×10冊=17,000冊
- 5) 図書館がよくなるもダメになるも町民次第です
 - ①図書館を使いこなす
 - ②図書館を知り、考え、支える町民

図書館こそ21世紀の最大の勝利者

菅原 峻 講演会

「図書館はわたしの友だち」
二月十九日、田原町教育委員会主催、図書館フレンズ協力による、菅原峻氏講演会が華山会館で開かれました。



菅原氏は図書館計画施設研究所長として、全国各地の図書館で、その計画や設計にコンサルタントとして関わり、多くの優れた図書館の誕生に手を貸して来られました。そのうちの一つである佐賀県伊万里市の図書館には、田原町の議員団も訪れっております。

99年2月19日撮影

福祉センター建設

2億5000万円を計上

田原町は、一九九九年度当初予算案を公表した。一般会計は百六十億九千九百五十万円、前年度当初と比べて二・四％減となった。主な新規事業は、福祉総合サービスセンター建設（二億五千四百九十九万円）▽町立図書館設計（九千七百八十八万円）▽茶道会館（九千四百一十二万円）▽コンピュータセンター（二億四千六百八十五万円）など。

主役はあくまで町民

図書館づくりで菅原氏講演

田原町

田原町が計画している図書館建設の一環で、各地の公立図書館づくりに関わっている図書館計画施設研究所長・菅原峻氏を迎えた講演会（同町教育委員会主催）が十九日夜、同町の華山会館で開かれた。菅原氏は図書館の主人は住民、図書館が良くも、悪くなるのも住民次第。住民一人ひとりが図書館にかかり続けなければならないと語りかけた。

同町では昨年、「図書館及び生涯学習施設建設基本計画」を策定。その一方、魅力ある図書館づくりに向け、町民の関心が高まっており、町では、新年度に町民の声を幅広く聞く委員会を設けて建設所を決め、計画を準備することとしている。講演の菅原氏は、日本図書館協会に勤務後、二十年ほど前、同研究所を創設。専門的な教育と経験のある館長が必要と説明。さらに「住民が図書館の主人として、図書館を考え、支え、かわって行くこと」述べ、魅力ある図書館の実現には住民の姿勢にかかっていることを挙げた。

また、図書館の建設場所所は一人でも多くの町民が利用しやすい所が望ましく、複合施設はさまざまな例があるが、図書館としての計画をしっかり作り、設計にも町民が関心を持つべきとアドバイスした。

講演会

1999年度
平成11年度
田原町予算案

(4) 設計者が決定し、町役場には建設準備室

講演会が開かれた1999年2月、指名型プロポーザル方式で設計者が決まった。図書館建設が専門で、実績も豊富な株式会社和(やまと)設計(東京)になった。フレンズも、会報で設計業者の決定を伝えた。建設までの流れを図で分かりやすく紹介。設計案を作り、基本計画、基本設計、実施設計などのステップを踏み、建設へと至る。各段階の詳細についても文章で説明している。この設計過程で町民が関心や関わりを持ち、誕生したのが田原町図書館だ。

また、町議会や総代会、社会教育委員会など14の町内各種団体の代表者と行政との意見交換の場「図書館及び生涯学習施設建設懇話会」(以下建設懇話会)と、「建設用地選定委員会」の設置が決まり、フレンズからもそれぞれに1人ずつ参加すること

作 フレンズ

1999年
4月 月例会

夜・4月22日(休) 7:30~9:00
昼・4月23日(金) 10:00~11:30
共に文化会館 第2会議室にて

報告事項

1. 現在の建設計画は?

- 設計業者が決定しました。(1999.2.24・米・指名審査委員会にて)
- ⇒ 3月5日(金) 文化教育厚生委員会にて決定報告
- 4月1日付公報たほらにて通知

現在こまで来ています。

計画・建設のステップ



現在、和設計は、田原町の基本調査中です。

になった。

町生涯学習課と和設計は5月、10回にわたり町内各種団体にヒアリングを実施。フレンズへのヒアリングも行われ、メンバー10人が参加した。メンバーらは、フレンズが思い描く図書館像や生涯学習施設として「地域にふさわしい図書館であること」「子どもとお年寄りが元気に過ごせる場所」であることなどを伝えた。代表は「図書館こそ、情報センター・生涯学習のため最も必要な中心になる施設です。使

う人々の意見を聞いて、取り入れてください」と求めた。

和設計は、時間をかけて情報収集を続け、重要な局面では意見交換の場を設けることを説明。「図書館が町の核になるという意見には全く同感」「これからも情報収集を続け、それをそしゃくして分析結果を公表していきたい」などと話した。

フレンズの月例会では、「和設計は田原のことや町民1人1人のことを大切にしていると思った」と好印象を持ったことが報告された。

翌6月、町は生涯学習センター建設準備室（以下町準備室）を設置した。フレンズは早速、室長や室長補佐にインタビューを申し込み、現状や建設候補地の選定、今後の計画について聞いた。「図書館長はもう決まっているのか」との質問に、室長らは「内部から見識、経験を持った方をリーダーとして選出することは難しいので、外部から適任者を招くということも考えて検討中」と答えた。このやり取りを一問一答形式で会報に載せ、町民にも知らせた。

この6月、図書館生涯学習施設建設候補地選定委員会の初会合に出席するため町に
来ていた和設計は会合後、フレンズとのミーティングに参加し、意見を交換した。「こ
れまで図書館のなかった町でどのように町民の図書館に対する意識を変えていくこ
とができるか」「就園前の子どもを持つ親が親子で安心して使うことのできる空間を
どうつくっていくか」などの課題について話し合った。さまざまな意見が出たことで、
フレンズは「このような自由に意見交換のできる場が必要だと痛感した」。以後、和
設計が田原を訪れた際、フレンズとのミーティングや月例会が開かれ、設計者と町民
との意見交換が頻繁に実施されるようになった。

一方、町議会の文教厚生委員会に所属する議員と町準備室長は、滋賀県の八日市市
と能登川町の図書館を視察しており、フレンズは月例会で報告を受けていた。フレン
ズのメンバーも7月、2日間の日程で自主見学会を企画し、八日市市立図書館と能登
川町立図書館に加え、高月町立図書館と湖東町立図書館も訪問、計4館を見学した。

その見学会には和設計の社員2人も同行し、各図書館の特徴などを説明した。

8月には、町準備室の提案で和設計とフレンズのメンバーが近隣の図書館や生涯学習施設を見学した。準備室長と和設計の3人、フレンズのメンバー13人が豊川市中央図書館と蒲郡情報ネットワークセンターを訪れた。

是住久美子・現図書館長は「この時期、設計者と町民、そして行政が活発な意見交換を行いながら、先進施設の見学を通して、施設内のスペースを使い市民が生き生きと活動するような新しい図書館のイメージを共有できたことは有意義であったと思われる」（青柳英治編集「市民とつくる図書館―参加と協働の視点から」と述べている。

(5) 建設地が決定。館長候補も決まる

1999年9月の町議会定例会。図書館をめぐる大きな動きがあった。椿実治郎議員（無所属）の一般質問で建設地と館長が明らかになった。図書館を核にした生涯学習施設が町文化会館敷地内に建設されること、館長に東京都の日野市立図書館に勤務していた森下芳則氏（当時49歳）に内定し、10月に町準備室の主幹として配属されることの2点が、町側の答弁で分かった。議場の傍聴席には、フレンズのメンバー10人の姿もあり、椿議員の質問に対する町側の答弁に注目、固唾をのんで見守っていた。

町側は、町長諮問の図書館生涯学習施設建設候補地選定委員会の答申を受け、建設地を決定。「文化会館など既存施設と一体的に利用でき、相乗効果が見込まれる」などを選定理由に挙げた。館長に内定した森下氏は26年間、図書館に勤務し、日本図書館協会の図書館調査委員、評議員などを務め、図書館運営に造詣が深かった。



建設地に決まった町文化会館敷地



町は10月5日夜、文化会館で「図書館建設についての意見交換会」を開いた。その場で和設計が作った「田原町図書館及び生涯学習施設基本計画書の見直し案」を発表し、建設計画の概要を説明した。「こうした公の計画を町民へ事前に説明する意見交換会は初めてではないか」とフレンドズのメンバーは歓迎し、行政の意気込みを感じた。和設計は「まちのインフラ（基盤）としての図書館」など、まちにとってどんな役割を果たす施設なのか分かりやすく伝え、今後作られる基本設計の公開についても約束した。前の年、98年に講演した菅原氏もオブザーバーとして参加し、「今変わるべき図書館、その出発点が伊万里だとすれば2周目の大切なコーナーにあるのが田原です」と述べた。

翌日、町は町民各層の声に耳を傾ける場として第1回図書館及び生涯学習施設建設懇話会を開催し、基本計画の見直し案に沿って建設概要を委員に説明した。フレンドズ

のメンバーは、この会にも参加し、後日の月例会で自分たちの声が基本計画にどのように反映されるのか期待が持てることを報告した。

フレンズは10月、有志らによる2回目の自主見学会を企画し、メンバー3人が九州の苅田町、三日月町、伊万里市、森山町の4図書館を訪れた。館長に内定し、着任したばかりの森下氏と和設計の田戸義彦氏が同行した。伊万里市民図書館では見学のほか、「図書館フレンズいまり」と念願だった交流もでき、充実した見学会になった。

12月には、町主催の「図書館見学会・関市わかきプラザ」が行われ、多くのフレンズメンバーも参加した。1999年に開館したこのプラザは、総合体育館と福祉会館、図書館を結ぶ学習情報館で構成される複合施設で、同様の複合施設の建設を目指す田原に参考となる内容だった。年が明けた2000年1月には、フレンズが3回目の自主見学会を企画し、静岡県磐田市立図書館を訪問した。

1999年は、設計業者（和設計）が決まり、町役場に「図書館及び生涯学習セン

「ター建設準備室」が発足。建設地の決定、館長の内定、田原町図書館及び生涯学習施設基本計画書の見直し案の発表と、この1年は図書館建設へ節目の1年となった。

3 町民への情報公開、意見交換会

(1) 基本設計の説明、「情報広場」のスタート

2000年からは、より多くの町民を対象にした情報公開と意見交換、学習の場となる「情報広場」が始まった。初回の議題は基本設計。フレンズは、どのように町民に説明したらよいか町準備室から相談を受け、準備室、和設計と検討した。情報広場で町民の意見を拾い上げ、それを基本設計に反映させていくという考えのもとで進めることを確認し合った。フレンズは、ポスターのデザインや配布先の検討にも協力した。

開催の準備が進められ、2月26日、初めての情報広場が市内にある華山会館で開催された。図書館を核にした生涯学習センターの設計図が基本設計の段階で公表され

ることもあって、町民の関心は高く、町内の建設関連会社なども集まり、120人も参加した。和設計が設計図や模型を使い基本設計の内容を説明したあと、参加者がグループに分かれ、意見交換した。

生涯学習センターは、文化会館駐車場への新築と会館の増改築で建設し、2年後の2002年中のオープンを目指す。複合施設とし、新築部分の1階から3階までが蔵書収容能力35万冊の図書館が入り、文化会館の増築部分には生涯学習や情報化の施設としてコンベンションホール、ケーブルテレビ用スタジオ、音楽練習室、そしてフリースペースが設けられることが説明された。

グループ討議では、「打ち合わせなど自由に利用できるフリースペースの設置がい」「読み聞かせをやりやすい児童室が理想」など、さまざまな意見、要望が出され、会場は熱気に包まれた。町側は「利用する地域住民の声を大切にして、今後の実施設計に反映できるものは生かしていく」との考えだった。

地域住民の声大切に

田原

新図書館建設で説明会

2000.2.27
東愛知

平成14年度中の
オープンを目指す

田原町が計画している図書館を核にした生涯学習センターの基本設計がまとまり、二十六日、同町華山会館で住民説明会が開かれた。町民の関心は高く、子どもからお年寄りまで約百二十人が集まり、設計プランに対する活発な意見、要望を出した。町民の声に耳を傾け進めてきた同町では、「利用する地域住民の声を大切に、今後の実施設計に反映できるものは生かしていく」と考えた。

同センターは、町文化会館駐車場への新築と文化会館の増改築で建設、平成十四年中のオープンを目指す。計画によると、二階建て（一部三階）延べ九千二百平方メートル。新築部分の一階から三階までが図書館（延べ約三千八百平方メートル）で、一階がメーンの開架室となる。蔵書は約三十五万冊の予定。

文化会館の増改築部分は生涯学習や情報化施設とし、コンベンションホール、ケーブルテレビ用スタジアム、音楽練習室、フリースペースなどを設ける。説明会では、設計業者らが、設計図や模型を使い、施設配置の考え方を紹介した。説明後、参加者がグループ討議。施設や運営などについて意見を出した。施設に関して、「打ち合わせなどに自由に利用できるフリースペースの設置がいい」「広い託児室やトイレを設け、体の不自由な人も利用しやすい施設に」など利用者の視点から意見、要望を挙げた。また、「東側の立体駐車場は、付近を流れる汐川が見られなくなる」「駐車場が不足するのでは」と、さまざまな考えが出ている。（中村晋也）

2回目の情報広場は3月17日、フレンズの提案で菅原氏の講演会「こんな図書館がほしい」が開かれた。菅原氏の講演と意見交換会の二部構成。意見交換会では、参加者約50人が図書館、文化ホール周りの改修プラン、ホール以外の館内施設改修プランの三つのグループに分かれ、活発に意見を出し合った。フレンズが、町民から出された意見はどのように扱われるのかを町準備室に聞くと、準備室は「時間の許す限り設計者とともに変更も視野に基本設計の検討を継続したい」とし、町民の意見を取り入れるため基本設計の変更もいとわなない姿勢を示した。

基本設計の次のステップ、実施設計が大詰めを迎えていた7月には、情報広場の4回目が開かれた。図書館がテーマで、会場には100分の1の模型があり、参加した人たちは図書館の完成をイメージできた。この日は設計者側や森下氏が話をした。設計者の話を聞いた参加者の女性は『どこにもない図書館を（田原で）つくることができました』とおっしゃった時には、ゾクゾクするものがありました」とフレンズの

活動記録につづっており、当時の図書館建設に寄せる町民の大きな期待をうかがい知ることができる。

情報広場の開催にあたっては、フレンズの月例会に和設計や森下氏が参加し、事前に次回の内容を検討した上で行うという流れだった。情報広場は2001年11月まで計9回実施された。基本設計公開などの初回を除き、毎回、50人前後が参加し、最後の図書館建設現場見学会に100人近くが参加した。

(2) 待望の起工式と開館準備

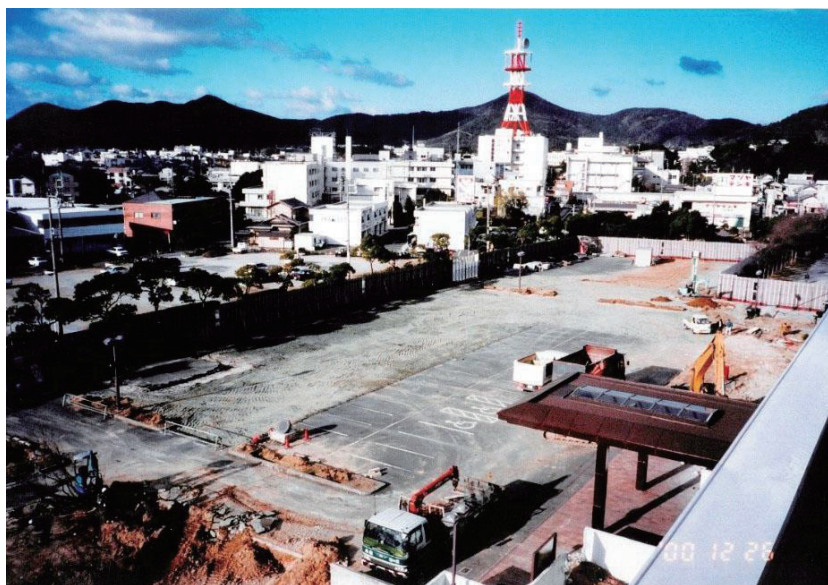
情報広場で出た意見も踏まえ、基本設計、実施設計が進められ、2000年11月21日、待望の起工式を迎えた。文化会館の増改築部分とともに2002年8月のオープンに向け、いよいよ図書館部分の建設が始まった。文化会館駐車場が建設地で、

建物は鉄筋コンクリート（一部鉄骨）造り3階建て。1階は、開架室、幼児・児童向けフロア、読書室、個室、学習などで利用できる机を配置する。2階は開架書庫、会議室、事務室。3階は閉架書庫などになる。移動図書館のため自動車図書館用の車庫が設けられる。建設費は2億8900万円。

館内は、自然光を取り入れた中庭、テラス、吹き抜けがあり、開放的でゆったりとした雰囲気味わえる「滞在型の図書館」を目指している。

工事を担当する町内の複数の建設会社でつくる共同企業体は、これまで手掛けたことのないような要求に応えながら工事を進めていくことになった。

図書館建設工事が始まった現場



町民と行政、設計業者をつなげた情報広場が始まり、念願の図書館着工を迎えた2000年。フレンズのメンバーは、この1年の活動などを振り返り、活動記録第2集につづっている。一部を抜粋する。

「私たちの図書館、私の図書館」

図書室を利用し始めてはや10年。 (中略) こんな私でもいつも迎えてくれた田原の図書室に、感謝を込めてお別れを言います。長い間ありがとうございました。

雑誌のプレゼント欄を見て、テニスシューズを当てたこともありました。まったく知らなかった作家に出会えて興奮し、原書を本屋さんに注文したこともありました。手に入らなかったけど、刺激を与えてくれてありがとうございます。

新しくできる図書館は「みんなの図書館」なのですが、利用者にとっては「私の図

「図書館」という気持ちがあると思います。そういう意識と図書館づくりの活動とは直結しにくいかもしれませんが、意思は表現しないと伝わりません。

「私たちの図書館、私の図書館」という気持ちや本に興味のある方々のご協力で図書館フレンズは成り立っています。

「図書館フレンズ田原に参加して」

（前略） 従来の公共施設と違って、行政と住民（利用者）が基本設計の段階から話し合い、実施設計に進んできたことは、素晴らしいと思います。まず和設計さんが、田原の多くの住民、グループの方々の声、希望を聞き取り調査し、田原町の地域性、事情等を考えに入れ、基本設計を作成しました。そしてその基本設計を公開し、さらに住民の声を聞き、修正するといった大変手間のかかる作業をしてくださった準備室、

和設計さんに大変感謝しております。(中略) 図書館が完成したら、多くの住民(子どもから大人まで)が図書館を利用、心豊かに、視野の広い考え方ができるようになるでしょう。この図書館を核として、住民の可能性が拡大し、想像力豊かな人が増えるといいなと思います。結果的に田原町が活性化、みんなが生き活きと暮らせるようになるのでは、と期待しています。(後略)

「自主独立した？ めだかたち」

(前略) 行政の皆さんのがんばりにも頭が下がる思いです。「情報は公開します」って勇気ある行動だと思うんです。だってこんなに公開しちゃったら、百色の意見が出るのは当然なことですもの。田原町の場合は、今ある文化会館の改修も含めるって

ことは、単に図書館だけじゃない問題もいっぱい抱えることになるし、下手すればアンチ図書館派をどんどんつくってしまうことになりかねないんですね。ひとつ、ひとつの意見に丁寧な耳を傾け、何度も設計図を書き直す、その作業を住民にオープンにしながら行っている和設計さん、力と熱意のある方々です。

でも、このように手間ひまかかる作業を公開されることにより、住民も責任を負うんだ、ということを実感しています。文句をいうだけでなくて、一緒に創り合う関係、自主独立した町民が、このプロセスに関わりながらつくられていく気がするんです。これが、菅原氏が言われるところの民主主義の学校かなって、勝手に解釈しています。

開館が待ち遠しいよ。そしたら、いの一番に出かけて、お気に入りの場所を見つけて、そよ風を感じながら本のページを繰り、いつの間にかすやすや眠りに興じたいな、想像しただけで至福の時間じゃないですか。

『図書館フレンズ田原』の今まで

2000年1月現在

	フレンズの活動	田原町、議会、準備室の動き
1992 夏 (平成 4)	「よい図書館を創る会」を始める。 ——神本浩子アンケート調査開始	
1994	くぬぎの会で近隣の図書館見学会・開催	
1995.3	「楽しさって文化なんだ」見学記・発行	
1996.3	講演会、囲む会に参加(くぬぎが中心)	「本と仲良くなるために」糸賀雅児講演会
1996.5 (平成8)		図書館建設構想委員会・開催 ～11月 答申発表
1997.3	「糸賀先生の話を開く会」開催	図書館及び生涯学習施設建設懇話会・開催
5～	定期的に会合を開く、設計者とのヒアリング	
11/21	「図書館フレンズ田原」誕生・ワークショップ参加	
1998.2 (平成 10)	懇話会で意見発表・「図書館フレンズはこんな図書館がほしいなあーKJ 法まとめ」	
1998.3		田原町図書館及び生涯学習施設基本計画書・発表(連空間設計)
1998.4 10～	「基本計画」についての話し合い	町議会・図書館・生涯学習センター特別研究会開催・報告書発表(10月)
1998.11	「基本計画」に対する要望書・署名(395名)提出 以後月例会(昼、夜2回)開催	
1999.2 (平成 11)	講演会協力・参加 「菅原さんと図書館見学」協力・参加	「菅原峻講演会—21世紀に贈ることのできる図書館を—」開催 指名審査委員会・設計業者決定、(株)和設計
1999.5	和設計とのヒアリング始まる、参加	基本設計・見直し作業、設計者と町諸団体とのヒアリング開催
1999.6	準備室をインタビュー訪問、以後定期的	図書館及生涯学習センター建設準備室発足
7/10,11	フレンズ自主図書館見学会(滋賀県)	7/13,19 建設候補地選定委員会開催・答申 <文化会館周辺敷地に決定>
8/5	準備室、設計者で行く図書館見学会(豊川・蒲郡) 建設懇話会委員を決定	建設懇話会参加者の募集
9/7	月例会(議会傍聴)	定例議会にて建設候補地と館長予定者公表
1999.10/5	月例会・意見交換会参加 「菅原先生を囲んで」	10/1 森下芳則氏(日野市より)着任
10/6	第1回建設懇話会参加・月例会「森下さん歓迎」	10/5 公開意見交換会・開催 (和設計・菅原さん参加)
10/8～10	フレンズ自主図書館見学会 II(北九州)	10/6 第1回建設懇話会開催
2000.1	フレンズ自主図書館見学会 III(静岡県・磐田市)	

年が明けた2001年からは、翌年の図書館オープンに向けた本格的な準備がスタートした。4月には、経験豊かな司書2人が採用され、町準備室で業務を始めた。フレンズは早速、2人を取材し、会報で紹介。その後も正規職員や嘱託職員の司書が採用されると、インタビュー記事を会報に掲載した。毎月の会報では、工事の進捗よく状況なども伝えた。

田原町は来年の開館に向けて、図書館のイメージキャラクターを募集、824点の作品が寄せられた。審査の結果、豊橋市のグラフィックデザイナー男性の作品に決まった。

【新聞記事】東愛知 2001年6月19日付

田原町新図書館
イメージキャラクター

読書で知識広げ心一つに

尾崎さんの作品に決まる



表彰状を受け取る尾崎さん（田原町役場）

田原町に来年八月より、十六日、表彰式同
ブンスの図書館のイメージキャラクターが決ま
り、市緑ヶ丘、クラフック
デザイナー・尾崎秋夫さ
んへの作品で、読書を
通し、町民が知識を広げ、
心をひとつにさせること
をイメージし、二人の子
が本を開く姿をサイン
した。図書館づくりに参画し
てもらおうと、同町教育
委員会が、イメージキャ
ラクターを公募。町内の
小・中学生、各地の専門
学校生から八百二十四
名が寄せら
れ、アイデ
ア、デザイ
ン性を
審査した。
入選一点の
ほか、佳作
三点和小・
中学生の中



尾崎さんがデザインした
イメージキャラクター
尾崎さん以外の入賞者
は次の皆さん。
▽佳作▽小沢隆史（名
古屋市）藤田典子（同）
吉田有里（大垣市）▽小
学生・優秀作▽杉原健太
（衣笠）寺田翔子（大草）
藤原秀一郎（大草）▽中
学生・優秀作▽内藤澄人
（野田）柴田百合衣（田
原）中泉有里（同）
（中村晋也）

から優秀作六点を選ん
だ。表彰状を受け取った尾
崎さんは「一度は訪れた
立派な図書館。大いに
利用してもらいたい」と
図書館に期待を込めた。
尾崎さんは仕事などで田
原と縁もあり、たはら図
書館は「……」
際交流協会、町内の小学
校などのマークも手掛け
た。
尾崎さんの作品は利用
案内などに採用される
が、開館に先駆け、九月
から始まる移動図書館の
利用カードにさっそく使
われる。

6月には、フレンズのメンバーと森下氏が、地元のたはら国際交流協会が主催する町民海外派遣事業に参加し、フィンランドとスウェーデンを訪問。フィンランドではヘルシンキ市立中央図書館を、スウェーデンではレクサンド市立図書館とストックホルム市立図書館を視察し、国内だけでなく、海外の図書館も見て見聞を広げた。帰国後、両国の図書館で提供されている充実した利用者のためにあるサービスや、そこで働く職員の多さについて報告した。

9月からは、3000冊を積める移動図書館「いずみ号」の巡回が始まった。この年の7月末で閉鎖する図書室に代わって地域を巡る。巡回先は小学校を中心に10カ所。移動図書館では、新しい図書館でも使用できる利用者カードを作ることでもできた。

【新聞記事】東愛知 2001年9月23日付

3000冊の本町内巡回

田原町が移動図書館運営



移動図書館で本を借りる児童たち

＝田原町南郷小学校で

田原町は今月から、車を使った移動図書館を始めた。約三千冊を載せて町内の小学校を中心に巡回、貸し出している。図書館を含めた町生運学習施設の建設工事に伴う図書室の閉館に合わせ実施した。子どもたちに読書への親しみを持ってもらおうと、各小学校に毎月二回出向くほか、町リサイクルプラザに毎週木曜（第五週除く）と第二・第四日曜に巡回するだけでも利用できる。車いすや母は頃から譲り受けたもので、車内の棚には絵本や児童書、単体の棚には小説や実用書など一般書が並ぶ。

利用カードはその場で発行され、一人十冊まで無料で借りられる。返却は次の巡回時。本のリクエストにも応じている。移動図書館は来年三月まで巡回し、八月開館予定の新図書館の準備のため、九月から再開する予定。

（中村晋也）

各小学校には午後二時

開館1年前の8月になると、図書館の開館記念行事の内容を検討するための図書館オープニングフェスティバル実行委員会（以下実行委員会）の初会合が開かれ、記念講演の講師などについて話し合った。

一方、情報広場は図書館の建設が始まっても継続され、どんな図書館になるのかのほか、図書館建設と並行して進められている文化会館の改修などをテーマとし、建設現場見学会も開かれた。町民への情報提供が途絶えることはなく、田原の図書館づくりはつねに住民参加のもとで進められた。情報広場が市民協働をもたらした。

田原町教委 愛される滞在型の図書館 にしたい。皆さんの意見 や希望を聞かせてくださ い」とおぼいさ。設計や 現場の責任者から進捗 （やまへ）状況や複合施 設として、コンメンショ ンホールや立体駐車場の 建設などの説明を聞き た。 初めて全体を見た町民 の一人は「白煙でる姿 晴らしい図書館になりそ う。堅苦しくないコミュ ニケーションの場とし ても来られる所になれば」 と話していた。

田原町教育委員会は三日、新図書館建設現場見学会を開いた。これは生涯学習整備事業の一環で、町文化会館の駐車場跡地に図書館を増設するもの。二〇〇二年二月二十五日の完成後は今の図書館の一十五倍の広さで、将来的には蔵書二十五万冊を予定している（現在三万冊）。
この日は百人余りの町民が参加する中、生涯学習センター建設準備室の



教育委員会からの説明を聞く町民たち

(3) 市民協働の図書館づくりを支えた設計者と町職員

設計を担当した和設計は、町民の声に耳を傾け、業務をこなした。フレンドの月例会に参加するだけでなく、町準備室の職員とサークルやボランティア団体へのヒアリング、住民への説明会、意見交換を何度も実施した。森下氏によると、基本設計前のヒアリングは100回に及んだという。それぞれの団体からは「自分たちが活動できる部屋や物を置ける倉庫がほしい」「台数に余裕のある駐車場が必要」「子どもたちの学習できる場所が必要」などさまざまな要望、意見が出された。田原町の図書館は何を目指すのかなどについて、丁寧リサーチやヒアリングを繰り返すことで、計画に落とし込んでいった。

一方、行政側は町準備室長を務めた太田誠雄氏を中心に町の一大事業を進めていた。太田氏は「図書館については素人」と自ら認め、休日には成功していると聞いた各地

の図書館へマイカーで出掛け、どのような条件なら成功するのかなど、図書館に関する知識を蓄えるため努力を重ねていた。その上で、フレンズや町民、設計者、町役場各部署との関係を築き上げていた。太田氏は図書館開館前の2002年4月、町の人事異動で公園緑地課の課長へ異動した。

こうして田原町図書館は、フレンズを中心とする町民の参加と、町民と設計者、行政担当者の協働によってつくられたと言える。

和設計の田戸氏、館長に就任する森下氏、町の太田氏が、それぞれ開館を前に図書館づくりを振り返り、思いをフレンズの会報に記している。

和設計の田戸氏は、これまでの意見交換会を振り返り、フレンズの会報（「活動記録集」図書館フレンズ田原2000年）に次のように文章を寄せた。

今回の田原町の仕事は、私たちとつても特別なものになりそうです。設計の辛さや孤独感をやわらげ、出来上がる喜びを共有できる数多くの仲間を得ているからです。図書館サービスを立ち上げ、そして運営していく準備をしている準備室の太田さん、立岩さん、熱血館長の森下さんや、その図書館の利用者となる多くの人々、とりわけその準備に多大な情熱を傾けてこられたフレンズの方々の存在はこれまでに経験し

たことのない「協働」の喜びを与えてくれました。

ともに準備して盛り上げた「情報広場」。その打ち上げに、皆でわいわいとはしゃいだ思い出は今も鮮明です。こんな楽しかったことが過去にあったでしょうか。多くの「同志」と喜びを分かち合あうことがどんなにすばらしい体験か、この喜びをもっとたくさんの人と分かち合いたいと思うばかりです。

参加と協力の図書館をめざして

森下 芳則

99年11月に始まった図書館建設工事よいよ最後の時期になりました。巨大な客船のようにも見えるシルエットがあらわれ、ゆるいウエーブのかかった南側壁面も明るい茶に吹き付けられました。

毎朝の出勤時に、たくさんの工事関係者と行き交います。建設工事に関わるひとりひとりの仕事、立派な施設に結実してゆくことを実感します。しかし、同時にになにか不思議な感覚も味わいます。姿をあらわしつつある立派な図書館が、まるで実物大の模型のようにも感じるので。図書館員である私は、書架に資料が満たされそこで働く図書館員と利用者の賑わいがあふれるようになった時に、現実の図書館であることを実感するのです。

私が田原で仕事を始めて2年5ヶ月になります。新しい図書館のために施設と資料と人を確保すること、施設と運営に関わるすべてをハードとソフトの両面で準備することが、私たち建設準備室の仕事でした。

私にとってこの間の一番大きな経験は何でしょう。それはフレンズと町民の皆さんへの説明と意見交換の場「情報広場」でした。「情報広場」は、町民、設計者、行政の三者による参加と協力を具体化したものでした。もし仮に「情報広場」が無くても図書館はできたでしょう。しかし、「情報広場」を通じて図書館建設という「歴史的なイベント」に皆さんと一緒に参加し、図書館が本当に町民のものになる機会を共有することができました。



「情報広場」を重ね、図書館の建設と運営にひとりひとりが当事者として要望や経験を出合いました。図書館活動の理念経験を提示し予算や人員、スケジュールなど建設の具体的な条件の下で結論を出さなければなりません。経験や知識、現状認識、また立場にも違いがある人間同士のことです。正直、苦しいこともあります。しかし、図書館の専門職員としてこういうスタイルを開館後の運営にも継続するという気持ちを固めています。

太田氏は、フレンズの会報号外(2002年4月)にコメントを次のように寄せた。

ありがとうございました。

図書館フレンズの益々のご活躍を祈念いたします!!

4月1日から公園緑地課に異動し、3週間が経ちました。

今度は、図書館を外から見る立場になりました。

あるインテリアの専門家が、田原の図書館を見て「この図書館は、世界の人が見に来ますよ」と言っていたということを聞きました。

今つくづく、フレンズの皆さんをはじめ、多くの図書館を思う方たちの絶大な協力により、良い図書館ができて本当に良かった、と思っております。しかし、田原の図書館が本当に良い図書館になるかどうかは、これからが大切です。図書館の歩みで言うと、建物ができて今ようやく第一歩を踏み出す準備ができたところです。図書館の主

役である利用者が、これからの田原の図書館を育てていくことになります。

将来、皆さんが「自分たちの町の図書館が、どこの図書館よりも一番良い図書館である」と誇れる図書館に育てば、それが世界一の図書館に匹敵する価値があるのだと思います。

図書館フレンズ田原の活動は、これからがいよいよ本番です。

皆さんの益々の活躍を祈念しています。

住民と歩んだ図書館づくり

【新聞記事】東愛知 2002年7月6日付

来月待望のオープン

蔵書9万冊「滞在型」目指す

田原町

田原町中心部の町文化会館に仮設された町立図書館が八月二日オープンする。蔵書三万冊の図書館しかなかった住民にとっては、待望の図書館となる。町では、住民の関心が高い施設のため、建設地や建築などを決める計画段階から館長候補の職員を採り出し、利用する住民と活発に意見交換しながら図書館づくりを進めた。開館時の蔵書は約九万冊、子どもからお年寄りまでが利用しやすい「滞在型」図書館を目指している。

(中村晋也)

町立図書館建設は、民カルフ「図書館」一九八六昭和六十二年「田原」は、建設に随する情報公開と、計画段階から図書館づくりにかかわる専門的な知識を持った職員の配置を求める。その後、構想づくりが始まり、町は九年に建設場所の候補地を示したが、議会や市民団体から、さまざまな意見が出たため再検討。翌年、議会、町民の代表をつくる候補地選定委員会の審判を受け、文化会館敷地内への建設を決めた。建設場所をめぐる議論の中で町民の図書館建設への関心が高まった。町

こうした動きの中、町間は建設地決定後、館長候補の職員として図書館に勤務していた経験豊かな森下芳則・生田幸吉ゼンター建設準備局長を採

用。さらに、町民との意見交換の場を設け、図書館に携わる行政責任、設計業者が一体となって施設設計をまとめた。一昨年に着工、その後に見学会を開き、工事

中の図書館を公開した。開館の準備が進む図書も配置、ゆったり読書が楽しめる工夫を施した。二階建て、造り三層建て、広さ三千九百平方、東西に長く、一階がイ、万冊を収容し、会館の町村でフレブルの公立図書館を目標としている。町民にも広く大きな図書館づくり、森下室



来月二日にオープンする図書館の幼児・児童フロア。田原町内。

4 中央図書館の誕生

図書館開館の年、2002年を迎えた。フレンズの年始の会報は、

『図書館のある暮らし』が始まる2002年！

8月2日（金）開館（予定）！

新図書館の開館予定：今年の夏休みだっ！小学生、中学生に高校生、そして保育園や幼稚園に行っている君たち、そして、もちろんみくんな、どなたにも…今年の夏は楽しいぞ！

の見出しや文字が躍った。

2002年4月、町準備室には新規の司書職採用職員2人、職員1人、嘱託職員8

いよいよ迎えた8月2日の開館日。「図書館をはじめます！」と題した開館式典には、フレンズのメンバーも招かれ、町民らが待ちに待った図書館がオープンした。フレンズのメンバーは、実行委員会のメンバーとして記念行事の企画、運営にも深く携わり、当日は来館者を着ぐるみで出迎え、チラシを配布するなどした。開館の喜びを味わう暇もなく、図書館職員とともに目の回るような忙しさだった。

町民からは「田原の空気が変わったね。これからもどんどん変わるだろう」「こんなに人が集まって来る場所は今までなかったよ」「広いですね。すごいです、もうびつくり、感動です」などの声が寄せられた。

念願の図書館オープン

田原町 関係者200人祝う



田原町図書館が二百、町生涯学習センターの中核施設として沙見にオープン。町や各自治会、学校などの関係者約二百人が出席して開館式があった。

町内にはこれまで、一九八三（昭和五十八）年に開設された蔵書三万冊の町生涯学習センターの中核施設として沙見にオープンした田原町図書館、

の図書室（百六十平方メートル）がなかった。本格的な図書館建設は六六年の第二次町総合計画に初めて盛り込まれ、九六年の図書館建設構想委員会の答申で、町民の念願が具体化した。

完成した図書館は鉄筋コンクリート三階建て、延べ約四千平方メートル。現在、九万冊の本と四百六十種類の雑誌、新聞、千四百冊のCD、DVD、絵画も貸出し出す。最大二十五万冊まで収蔵でき、今後蔵書を増やしていく。六つの中庭や畳敷きコーナーなどを備えた快適な空間で、郷土資料や外国語の本、児童書も充実している。平日は午前十時～午後七時、土日・祝日は午前十時～午後五時に開館。月曜休館。

式では田原中部小学校の児童たちが合唱を披露。白井孝市町長が「住民が利用しやすい図書館に」とあいさつし、テープカットした。森下芳則・町生涯学習センター建設準備室長が初代館長に就任した。

【新聞記事】東日 2002年8月3日付

蔵書35万冊

町立では全国屈指

田原町新図書館オープン

田原町新図書館のオープンを記念して
テープカットをする白井孝市田原町長ら



町文化会館と接合

田原に新しい図書館が2日、オープンした。延べ床面積が約3,970平方尺、蔵書数が約35万冊で、町立の図書館では全国屈指の規模を誇る。中には、約1,000人の町民が参加してオープニングセレモニーが開かれ、新図書館の完成を祝った。

新図書館は、鉄筋コンクリート造り、5月にリニューアルオープンしたばかりの町文化会館と接合して造られた。新図書館は、検定用パソコン端末3台、インターネット端末3台、DVD（デジタル・ビデオ）オ・ディスクシステム3台のほか、聴覚障害者用の点字ディスプレイなども整備された。また、すべての職員8人を含む職員16人が一人掛けになって、全員が司書資格を持つ。

いるほか、和室の閲覧室、授乳室、個室になっている研究室3室、読書コーナーが美しく、玉置などから招いた美術

経費で、図書サービスの即実践を図った。駐車場は、図書館の建設工事とあわせて整備された立体駐車場も含め約300台が収容可能。新図書館は、86年に制定された町接合計画で初めて打ち出されたが、中心街地の再開発が延びたために、新図書館の建設も遅れた。

その後、96年に建設構想委員会が具体的な方針を審。設計段階では、主だった住民組織や個人を対象に100以上のヒアリングを開き、図書館の設計に生かすなど、市民が開かれた図書館づくりにあめきしてきた。

森下館長は「ボランティア活動などに携わる住民々との協働の場としても新図書館を積極的に活用していたが、町の活性化の一翼を担った」と語っていた。

オープニングフェスティバルは開館後も続き、作家の落合恵子氏や児童文学者の斎藤淳夫氏の講演会、動物画家の藪内正幸氏のこども本（絵本）原画展が行われた。図書館と文化ホールをつなぐ空間アトリウムでは、音楽コンサートが開かれた。小学生対象の図書館探検隊（見学会）、おはなし会、人形劇などの行事も行われ、たくさんの方々が来館し、田原に初めてできた図書館の開館を祝った。12月20日には、田原町図書館のホームページが開設された。

こどもの本原画展



開館時の図書館の利用実績をみると、8月2日～31日は貸し出し点数が4万5421点、利用者は1万4296人、入館者数が6万3621人。開館当初のにぎわいは徐々に収まり、9月は貸し出し点数が3万4158点、利用者は9997人、入館者数が3万9094人だった。

町準備室で町民と一緒に図書館づくりを進めてきた立岩副館長は、開館3カ月半を振り返り、フレンズのインタビューに答えている。

「入館者も利用も、ほぼ予測通りでした。順調な滑り出しができている現状だと思います。今までなかった雑誌の貸出や、生活関連本利用の女性など、身近になった図書館という感があります」と感想。「新しい試みがいっぱいある図書館。従来の図書館とは利用勝手が違う（例えば学生たちとの分離は？）という声もありました。ご理解していただけるように説明しています」と利用者の反応も紹介している。

一方、フレンズは開館した年を振り返り、会報に「図書館が『ない』時があったな

んて信じられない今…… 私たちの図書館元気です。連日、にぎわっています。利用の形はともさまざまで、みんな『もうすっかり、自分のモノにしてる(?)』があります。あなたの生活、変わりましたか？ 今、あなたはどんな風に図書館とお付き合っていますか？」と待望の図書館誕生を喜ぶ気持ちを記した。

2003年の開館1年をみると、図書館の入館者数は43万277人。貸出点数は49万9402点、住民1人あたりでは13・5点にのぼった。

完成した図書館の航空写真



【新聞記事】読売 2002年10月27日付

滞在型で大人気

田原町図書館

8月開館すでに3万人が利用

最新の滞在型図書館として全国から注目を浴びる田原町図書館(森下秀則館長)が八月上旬の開館以来、予想を超える入館者を集める人気を博している。

同図書館(約四千平方メートル)は八月一日にオープンした。学習室は多く、計二百五十席を二十席単位で分散させた。総費用は約二十億円。

収蔵点数(ビデオ、CD含む)は、図書室時代の約三万四千点から約十二万点に大幅アップ。貸し出し登録者も、図書室時代の最高が年間二千七百八十八人だったのに対し、十月二十日現在で一万九百七十八人。町民の登録率は26・8%は「森下館長」と、これ



快適空間が好評の田原町図書館

と、四人一人を越えるように読者に驚く。人気の理由として、①入館者数も、図書室時代の最高の間四万二千九十九人(八月一日)が、開館から十月二十日までに三万二千六百六十三人となり、「貸し出し目標の四万冊は達成し、入館者目標の二十五万人は四割の五割になるのである。」

②インターネット端末の配備などの利便性③授乳室、人形劇も開けるミニシアターや、グループでビデオ、CDを楽しめるAVブースなどの快適性④防音録音室などの設備などを上げている。

また、事典・辞書を歴

史などの関連部門に働き、貸し出しに依るな工夫をしている。

森下館長は、「リビーター雑誌類も、新しい情報を増やそうと各言葉に工夫し、期待にこたえたいので、四百六十種の「す」と話している。

↑
訂正
3万人→13万人

5 フリースペースとフレンズNPO法人移行

(1) フリースペースの運用

2000年に公開された基本設計で複合施設内には、フリースペースが設けられることになり、運用について検討が重ねられていた。フリースペースは、図書館と文化ホールの間のアトリウムに面した吹き抜けの1階と2階に計画された。ボランティアやNPO、サークル、住民らが集まったり、話し合ったりするのに予約なしで自由に利用できる、住民活動などの拠点になることが考えられた。このため、印刷機やロッカ―も備えられることになっていた。

住民らの「フリースペースって何」といった疑問に答えるため、2000年5月20

日の第3回情報広場では、フリースペースの意見交換が行われ、先進地から、かながわ県民活動サポートセンターの石田静子氏を講師に迎えた。

町は2001年、コンペティション（コンペ）形式でフリースペースの活用方法の提案を募集、フレンズの提案が採用された。その提案は、後の「リサイクル・ブック・オフィス」につながる「リサイクル本のコーナー」だった。

フレンズは2001年に4回ほど、フリースペースについて話し合ったほか、先進地として、かながわ県民活動サポートセンターや横浜市民活動支援センター、NPOセンター鎌倉、八日市市立図書館を視察し、その後、報告を兼ねた座談会も行った。フリースペースは、利用者による自主運営を基本としつつ、町生涯学習課が管理することになった。2002年からは、運営会議も始まった。

フリースペースがオープンしてからは、自習をする中学生や高校生らによるごみ問題が発生したが、フレンズのメンバーがフリースペースの閉館時間の午後10時前に

見回りや掃除、中高校生への粘り強い呼びかけなどをして利用のルール、マナーを浸透させた。

アトリウムに面した

1、2階にあるフリースペース



(2) リサイクル・ブック・オフィスの開始、NPO法人化

フレンズは2003年、実行委員会の一員として開館1周年を記念したフェスティバルの内容を検討しながら、図書館で開催のさまざまなイベントの運営ボランティアとしても忙しく動き回っていた。6月には、リーススペースの一角で寄贈本や図書館の除籍本を集め、1冊50円で販売する「リサイクル・ブック・オフィス」を始めた。これは、本の有効活用を目的とし、販売の収益から運営にかかる必要経費を差し引き、大活字本を購入し、図書館に寄贈するという事業だった。フレンズは、建設計画の検討段階で多くの図書館を視察した結果、除籍資料を販売する仕組みがつかれないかどうか検討していた。

この事業を行うため、団体としての責任や透明性をより明確に位置付ける必要があると考えたフレンズは、NPO法人の認証を受け、「特定非営利活動法人たはら広場」

(以下たはら広場)として活動を始めた。田原町教育委員会からリサイクル・ブック・オフィス事業やイベントのチケット販売の認可を受け、たはら広場は、8月2日の図書館開館1周年の記念日にリサイクル・ブック・オフィスを始めた。毎年、図書館開館日の8月2日に合わせ「図書館のお誕生日会記念行事」を企画し、アトリウムを会場に音楽会や朗読会、ボランティア活動の紹介を行い、リサイクル・ブック・オフィスによる大活字本の贈呈式も開いている。

リサイクル・ブック・オフィスは毎週金・土・日曜日の午後、本を販売する。年に1回、文化会館で開かれるイベント「たはらエコフェスタ」に合わせ、ガレージセールを図書館の移動図書館車の車庫を利用して実施。普段よりも多くの本、雑誌を販売して収益を上げている。リサイクル・ブック・オフィスは、図書館の利用者だけでなく、古書の購入を求めて訪れる人もいて、販売に立つボランティアとの交流にもつながっている。

フレンズ

1. 特集

大活字本32冊の贈呈式を行いました。11/4(木)

フレンズが1997年7月から図書館と市民との協働のカタチを模索して7年…昨年からやっと軌道に乗った「リサイクル・ブック・オフィス」での活動が、「収益で大活字本購入」という現実になって「実体」を現わしました。“これはひとつのカタチの始まり”そうです。これは始めて通過点。次の取り組みへのベースです！広がり、始まっている次へのはなむけになりました。

11/5 東愛知新聞より
 新聞記事から！
 田原市図書館が、大活字本32冊を贈呈した。これは、市民と図書館との協働のカタチを模索して7年…昨年からやっと軌道に乗った「リサイクル・ブック・オフィス」での活動が、「収益で大活字本購入」という現実になって「実体」を現わしました。“これはひとつのカタチの始まり”そうです。これは始めて通過点。次の取り組みへのベースです！広がり、始まっている次へのはなむけになりました。

2. あれから・あれから…

① 語り部・細川律子さんと再会！

・10/30(日)「語りを聞く会」

・&11/1(月)「細川さん in 金沢」

フレンズメンバーで田原市博物館友の会・会長でもある石原さんは、恒例の友の会・秋の一泊旅行を金沢に決めました。しかも夜「細川さんの語りを聞く会」に参加できるというものです。40名程の参加者の内、今年3月に行った会にも参加したことがある方が数名いらっしゃいました。

どっしりとした柱や梁に支えられた部屋で、細川さんの昔話や宮沢賢治をしみじみ味わいました。また翌日の兼六園見学も細川さんはご同行してくださいました。とてもところが満ち足りた旅でした。細川さんと石原さんに感謝！今度はまた田原で再会！

学校図書館司書さんのパネルシアターへの取り組みも盛ん！今度発表会やするよ。11/26(金)午後5時こども室・おはなしのへやへ来てね！

2004年 11月 月例会
 夜・11月17日(水) 7:30～9:00PM
 昼・11月19日(金) 1:30～3:00PM
 ともに文化会館フリースペースにて
 図書館フレンズ田原(事務局 tel&fax22-6349)

大型活字本32冊寄贈

市図書館へボランティアグループ



このたびは、田原市図書館へ、ボランティアグループ「リサイクル・ブック・オフィス」から、大活字本32冊を寄贈しました。これは、市民と図書館との協働のカタチを模索して7年…昨年からやっと軌道に乗った「リサイクル・ブック・オフィス」での活動が、「収益で大活字本購入」という現実になって「実体」を現わしました。“これはひとつのカタチの始まり”そうです。これは始めて通過点。次の取り組みへのベースです！広がり、始まっている次へのはなむけになりました。

田原市図書館へ、ボランティアグループ「リサイクル・ブック・オフィス」から、大活字本32冊を寄贈しました。これは、市民と図書館との協働のカタチを模索して7年…昨年からやっと軌道に乗った「リサイクル・ブック・オフィス」での活動が、「収益で大活字本購入」という現実になって「実体」を現わしました。“これはひとつのカタチの始まり”そうです。これは始めて通過点。次の取り組みへのベースです！広がり、始まっている次へのはなむけになりました。

② 読書週間とくぬぎの会

読書週間です。学校や中央図書館ではいろんな行事が行われました。もう定番になってきたくぬぎの会の学校などへ訪問も多忙でした。以下のところから「来てください！」とリクエストを受けて、お話をお手伝いしてきました。読み聞かせ、手遊び、紙芝居、ペープサート、パネルシアター、ミュージックシアターなどなど・

次回はぜひあなたもごいっしょに！

- * 大草小学校 * 南部小学校
- * 六連小学校 * 西部児童館
- * 神戸保育園

2011年の東日本大震災のあとは、被災した岩手県の陸前高田市立図書館を支援しようと、古書を寄贈することで寄付集めに協力できる「チャリボンプロジェクト」に賛同し、サポートを続けている。

リサイクル・ブック・オフィス



6 図書館を支える市民協働

たはら広場と図書館は2012年、図書館のさまざまな活動をサポートするボランティアグループ「田原市図書館サポーターズ・おおきなかぶ」を発足させた。図書館が開館した時のオープニングフェスティバル実行委員会が前身で、モットーは「いつでも、だれでも、時間があるときに、活動できる時間だけ・かぶボランティア」。リサイクル・ブック・オフィスの店番など各活動への参加を市民に呼びかけている。

活動の一つ「本ぴか隊」は月1回の館内整理日にボランティアが集まり、絵本や児童書を拭く。市社会福祉協議会からの依頼で、障害を持つ人たちが職業訓練の一環として加わることもある。

「リサイクル・ブック・オフィスのお店番」は毎週・金・土・日曜日の午後1時30

く3時30分、同3時30分く6時、除籍
本と寄贈本の販売にあたる。これら除
籍本などを整頓する作業も、第3金曜
日の午前10時く12時に行われている。

本ピカ隊の活動の様子



また、手作り布絵本や図書館こども室を飾る布製品を作る「ハンドの会」といった活動や、くぬぎの会が定期的におはなし会を開いたり、絵本の選書、勉強会を実施したりする。このほか、子どもを対象にした工作教室の作業補助、他のイベント開催時の受付など図書館からの要請を受けて多彩な手助けをしている。

おはなし会



2代目の館長、豊田高広氏が2010年に就任してからは、月例会議「おおきなかぶ会議」（以下かぶ会議）が月1回、館長室で行われている。かぶ会議は、館長ら図書館職員とボランティアとの意見交換、話し合いの場で、図書館の運営や協働事業の企画など、さまざまなことをテーマに話している。地域の動きや情報に敏感な図書館ボランティアは、多くの人とつながりを持っており、毎回、田原市内や県内などで活動している人を「かぶ会議」に迎えている。図書館をサポートするだけでなく、市民と図書館をつなぐ役割も果たしている。

豊田氏は、かぶ会議を定着させただけでなく、2019年までの在職中、幅広い取り組みをした。就任早々に直面したのが、三重県鳥羽市と田原市を結ぶ伊勢湾フェリー「鳥羽伊良湖航路」の存続問題だった。図書館ができることとして、19年の夏に「再発見！鳥羽⇄伊良湖フェリー展」だった。社会問題を市民らに知らせるテーマ展示で、意義深い展示となった。中央図書館「こどもしつ」には、植物なども含めた科

学に関する資料を集めた「かがくのへや」をオープン。また、情報技術を積極的に取り入れ、図書館の利便性を向上させた。司書ら職員の育成にも尽くした。後で述べるが、2012年には、館内に「泉名月記念ふしぎ図書館」を開設し、「ふしぎ文学半島プロジェクト」を始めた。

このほか、開館時から実施しているレファレンスサービス(調べ物の相談対応業務)を行政、議会にも広げた。職員が市職員や市議の依頼に対応。調査したり、関連の本や資料、新聞記事などを提供したりする。2019年には、「第5回図書館レファレンス大賞」(実行委員会主催)で、田原市図書館の「まちづくりにつながる行政・議会支援サービス」が最高の文部科学大臣賞を受賞した。

7 誕生から20年の2022年

(1) ふしぎ図書館

コロナ禍で迎えた開館20年の2022年。たくさんの人を集めて大々的にはいかなったが、感染症対策をしながら、お誕生日会以外にも記念行事が行われた。

中央図書館には、泉鏡花の姪、養女で田原市出身の作家、泉名月（なつき） 1933年—2008年Ⅱの功績を記念して開設した「ふしぎ図書館」があり、幻想文学の世界を紹介している。

市図書館は11月、20周年記念行事として市中央図書館で「ふしぎ文学半島プロジェクト2022 トークイベント」を開いた。幻想文学や怪談文学の「ふしぎ文学」

を楽しむための入門書を中心にした本を、「ふしぎ文学の達人」たちで紹介した。テーマに「まずは、ここから踏みだそう！ ふしぎ文学はじめの一步」を掲げ、あいち妖怪保存会代表の島田尚幸さんの進行で、ふしぎ文学に詳しい翻訳家で法政大学教授の金原瑞人さんと文芸評論家、東雅夫さんの2人が選んだ本を説明した。

「ふしぎ図書館」には、鏡花の作品などのほか、金原さん、東さんが選んだ棚もあり、トークイベント後、参加者は見に行った。



「ふしぎ文学半島プロジェクト2022 トークイベント」



(2) ファンミーティング

20周年記念行事として、市図書館は9月、中央図書館で「館長企画！ 図書館ファンミーティング」を初めて開き、市内外から14人が参加した。中央、赤羽根、渥美の各図書館、移動図書館いずみ号などの「田原図書館ファン」が集い、中央図書館などの魅力を語り合った。

スタッフラウンジでお茶を飲みながら、くつろいだ雰囲気です。田原市図書館の好きなところを披露し、図書館愛を語った。多く挙がったのが、司書ら職員の利用者への対応。「優しく、親しみやすい」「一緒に本を探してくれる」といった声や、利用者と職員が互いに声をかけ合いやすい図書館という声もあった。

施設面の魅力も多く、「館内は明るくゆったり」「本棚の高さが程よい」「外観が素晴らしい」などの意見が上がっていた。また、蔵書では「読みたい本がなかったこと

がない」や、絵本の多さ、漫画の貸し出しを魅力に挙げる人もいた。

ファン同士、うなずくところも多く、終始、和気あいあいとした雰囲気だった。

是住館長は「初めてのことで不安でしたが、皆さんの図書館愛を知ることができ感動しました」と話した。

是住館長の案内で中央図書館バックヤードの見学もあり、ファンからは「普段は入れないところを見ることができた」とバックヤードツアーも好評だった。

田原市図書館の魅力などを語る // 図書館ファン //



8 田原市図書館のこれから

「図書館があったらいいな」「欧米のような図書館に」。そんな思いでフレンズの一人として、図書館建設づくりに携わってきた住民の小澤美穂子さんは、当時を振り返る。念願の図書館（中央図書館）ができて20年。どんな存在になっているのだろうか。「いつでも勉強できる場所。いろんな情報が転がり、欲しいものがある。行きたい時、気の向いた時、自由に自主的に行って手に取れる」と話し、図書館が生活の一部になっている。

図書館は、ただ本や資料を貸し出すだけでない。集客力の高い公共施設などとして、まちづくりを果たす役割や場所としての役割も大きくなっている。一例として、館内のスペースを活用し、個人や団体の活動を来館者に伝える取り組みが可能で、個人、団体、来館者をつなぐ地域交流拠点になる。また、気兼ねなく入ることのできる公共

施設の一つで、さまざまな人が利用している図書館。例えば、心の病に向き合っている人にとっても「社会復帰に向けた最初の場所にもなります」と是住館長。「図書館では他人と話す必要はありません。とはいえ、いろいろな人がいて孤独感はなく、社会の一員であることを感じることもできます」と話す。図書館は幅広い機能を持つ。

そして、図書館に関わる市民らボランティアについて、是住館長は「ボランティアがないと成り立たない事業、イベントもあります。パートナーとしてお互いに成長できたり、喜び合えたりと、支え合いながら歩んでいけたらと思います」。住民と図書館の協働は、これからも欠くことができない。

田原市中央図書館こどもしつ



おわりに

田原市で図書館が誕生するまでを中心に振り返りました。図書館建設を目指し、人口約3万5000人の小さなまちで動き出した市民活動、そして行政と業者、住民が手を携えた住民参加の図書館づくりは、当時、とても新鮮で「これこそがまちづくり」とわくわくしたことが記憶に残っています。1999年、図書館計画施設研究所の菅原氏が講演会で語った「町の将来を考えるのに欠かせない町の頭脳」「誰でも利用できる図書館こそが地域の核、求心力になる」といった図書館の姿も印象的でした。フレンズのメンバーや聴講した多くの人の心にも響き、活動の原動力になったに違いありません。住民や業者らあらゆる面で目配りした町職員、住民の期待、要望に応えようとした業者、陰で住民らを支えた町会議員、大局的な視点に立ち図書館建設計画を進めた町幹部。これらは、フレンズメンバーら住民の図書館愛と熱意、行動力があつ

たからこそで、協働の図書館づくりにつながったのではないでしょうか。田原の図書館づくりを顧みて思います。その一端を本書で感じていただき、これからのまちづくりの一助になれば幸いです。

図書館の歩み

年月日	出来事
昭和58年11月3日	文化会館図書室（160㎡）の開館
昭和61年3月	第3次田原町総合計画 「住民の多様化する学習意欲に対応できる図書館の建設を図る」
平成3年	田原中央地区市街地再開発基本設計 再開発ビルの公共スペースの一部に約1,300㎡の図書館を建設する
平成8年	第4次田原町総合計画□蔵書10万冊以上を備えた図書館の整備を促進する」
平成8年11月	図書館建設構想委員会答申 目標人口4万5千人、延床面積4千㎡、蔵書冊数35万冊（開架15万、書庫20万）、 年間購入冊数2万2千冊、職員15名程度
平成10年3月	田原町図書館及び生涯学習施設建設基本計画
平成11年6月	生涯学習センター建設準備室設置
平成12年9月	図書館建設着工
平成13年7月31日	文化会館図書室の閉館
平成13年9月	移動図書館「いずみ号」巡回開始
平成14年3月15日	図書館竣工
平成14年8月2日	田原町図書館開館
平成15年8月20日	田原町・赤羽根町の合併に伴い、田原市中央図書館、田原市赤羽根図書館（分館）と改称
平成15年9月	移動図書館「いずみ号」赤羽根地区3小学校への巡回開始
平成15年9月30日	田原市赤羽根図書館システム統合のため休館
平成15年12月2日	田原市赤羽根図書館再開
平成16年4月1日	視聴覚資料の貸出規則変更（4点3週間） 休館日規則 国民の休日を閉館とする
平成16年11月1日	「田原市子ども読書活動推進計画」策定
平成17年10月1日	田原市・渥美町の合併に伴い、田原市渥美図書館と改称 田原市渥美図書館システム統合のため休館
平成17年10月	移動図書館「やしの実号」渥美地区8小学校への巡回開始
平成17年12月1日	田原市渥美図書館再開
平成18年8月3日	中央図書館閉館時間延長の試行開始（木曜日午後8時まで）
平成19年10月2日 ～5日	図書館システム更新のため休館
平成20年7月1日	中央図書館無線LANサービス開始
平成20年9月	中央図書館英語多読コーナー設置
平成22年3月	移動図書館「やしの実号」更新
平成22年4月1日	田原市子ども読書活動推進計画（第2次）
平成22年7月7日 ～9月9日	「再発見！鳥羽⇄伊良湖フェリー展」開催
平成23年4月1日	「田原市図書館の目標」制定

平成23年6月25日	中央図書館こどもしつ「かがくのへや」オープン
平成23年8月	元気はいたつ便の試行開始
平成24年4月	全館無線LANサービス開始 「田原市新聞記事見出しデータベース」運用開始 行政支援サービス開始
平成24年8月2日	中央図書館開館10周年
平成24年9月	i P a d貸出サービス開始
平成24年10月30日 ～11月2日	図書館システム更新のため休館
平成24年11月3日	赤羽根図書館開館20周年 泉名月記念ふしぎ図書館（新コーナー）開設 ふしぎ文学半島プロジェクト開始
平成25年2月21日	電子書籍「お散歩e本」刊行
平成25年8月2日	田原市図書館T w i t t e r公式アカウント運用開始
平成25年11月16日 ～17日	「まちほん～田原まちじゅう本想い～」開催
平成26年3月5日	電子書籍「お散歩e本ふしぎ編」刊行
平成26年6月9日	渥美図書館開館20周年
平成26年12月16日 ～27日	渥美図書館リニューアルのため休館
平成27年1月6日	渥美図書館リニューアルオープン 書架サイン更新、ティーンズコーナー・学習室等2階の整備、リフレッシュコーナー新設、授乳室移設等、3階集密書架増設
平成27年2月1日	田原市図書館F a c e b o o k公式ページ運用開始
平成27年3月	「ハンディキャップサービス」から「にじいろサービス」に名称変更
平成27年4月	議会支援サービスの試行開始
平成27年7月1日	元気はいたつ便の本格実施
平成27年8月	「まち＊ほん 田原市生涯読書振興計画」策定
平成27年10月24日	ティーンズキャラクター決定
平成27年11月28日	ティーンズキャラクター名決定（なのピィ）
平成27年12月1日	学校図書館支援センター物流部門「コンテナ便」「ふくろ便」試行開始
平成28年2月27日	元気はいたつ便が「認知症の私と輝く」大賞受賞
平成28年4月	議会支援サービスの本格実施
平成28年11月12日	豊橋市図書館・田原市図書館連携事業開始
平成29年1月21日	「プラタハラ」をCode for Mikawa主催の本市初のウィキペディアタウン・マッピングパーティとして共催
平成29年3月	「田原市図書館マンガ資料収集方針」策定（4月1日施行開始） にじいろサービス登録対象者変更（一般貸出同様、居住地等を限定しない） 渥美図書館キャラクター名決定（としよまくん・としよみちゃん） トヨタ自動車田原工場連携開始
平成29年4月	「行政支援サービス」から「行政・議会支援サービス」に名称変更
平成29年7月	市役所アウトリーチサービス（出前図書館）の試行開始
平成29年8月2日	中央図書館開館15周年

平成29年9月	中央図書館15周年記念事業（図書館外部木部塗装修繕工事）
平成29年12月6日	すくすくタイムの試行開始
平成29年12月23日	中央図書館15周年記念事業（「うたう図書館フェス！」を愛知大学文学部メディア芸術専攻との共同プロジェクトとして開催。同時開催「あそぶ図書館」）
平成30年4月	学校教育支援サービス（調査の援助）の開始
平成30年8月	ジュニア司書講座試行開始 田原市ジュニア司書1期生誕生
平成30年10月20日 ～21日	ふしぎ文学半島プロジェクト2018「夜ふかし図書館」を開催。図書館に宿泊するイベント「読む夜」を実施。
平成31年3月31日	「田原市図書館資料収集方針」改定（4月1日施行開始） 「田原市図書館資料選定基準」策定（4月1日施行開始）
令和元年7月13日 ～9月8日	ふしぎ文学半島プロジェクト2019「ふしぎな浮世絵」を開催。田原市博物館と連携し、浮世絵作品の館内展示、市内施設のスタンプラリー、ナイトツアーを実施。
令和元年8月4日	議会支援サービスの一環として「図書館で議員と語ろうホリデー」を開催
令和元年11月12日	第5回図書館レファレンス大賞で、田原市図書館「まちづくりにつながる行政・議会支援サービス」が文部科学大臣賞を受賞
令和2年2月	市民提案型委託事業「田原のむかし話を伝える」を実施。特定非営利活動法人はら広場と協同で、紙芝居「前日物語」完成
令和2年3月	出前図書館、試行から本格実施へ（市役所は終了、9月開始のすくすくは継続）
令和2年3月3日	インターネットコーナーを廃止し、データベースコーナーに変更。（中央図書館・遼美図書館）インターネットの利用は、タブレット端末の貸出サービスに移行。
令和2年3月3日～31日	新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、図書館サービスを一部停止（閲覧室への立ち入り不可。予約資料の受け取り・返却のみ実施。イベントはすべて中止）
令和2年4月1日	図書館サービスを一部再開（閲覧室の立ち入り再開、30分以内の利用推奨、閲覧席の間引き、2階閲覧室、個室等の利用は停止）
令和2年4月1日	中央図書館 木曜日の閉館時間を午後7時までに変更 赤羽根図書館 休館日と開館時間変更 休館日 月曜日、日曜日、祝日、第2金曜日 開館時間 午前11時～午後5時
令和2年4月17日 ～5月10日	新型コロナウイルス感染症 愛知県緊急事態宣言発令のため、全館臨時休館
令和2年5月8日	赤羽根図書館 休館日と開館時間を再度変更 休館日 月曜日、火曜日、第2金曜日 開館時間 午前10時～午後5時
令和2年5月19日 ～7月26日	中央図書館 天井耐震工事のため、館内一部利用不可
令和2年6月25日	ホームページに「田原市図書館デジタルアーカイブ」を公開
令和2年12月5日 ～令和3年2月11日	山田もと生誕100周年記念事業「もとはあちゃんが残したたはらの民話」開催。（大草校区、田原市博物館、成章高校、大草小学校と連携し、記念行事、企画展、おはなし会、音読タイムを実施。記念冊子『表紙むかし話』を作成）
令和3年1月	雑誌スポンサー制度を開始
令和3年1月31日	中央図書館に、プログラミング体験スペース「たはらLab」を設置 キックオフイベント（全3回）を開催
令和3年3月	「まち＊ほん 田原市生涯読書振興計画 令和3年度～令和7年度」策定
令和3年10月16日	遼美図書館「きりり遼美のひとめぐり」展示開始
令和4年3月20日	図書館振興財団助成事業「地方新聞のデジタル化及び見出しデータのオープンデータ化」を実施。デジタル化が完了した昭和38年～昭和58年の東愛知新聞を、中央図書館データベースコーナーで公開開始

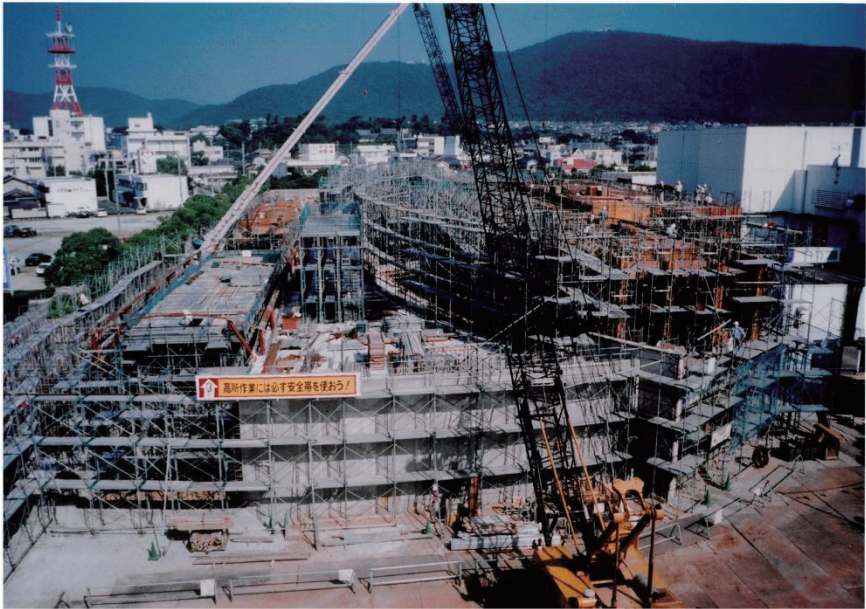
写真で見る図書館建設の様子





↑
着工から6カ月





感謝のことば

昨年8月2日、田原市中央図書館はOPEN 20周年を迎えました。始まりの頃を
ついつい思い返し、多くの方々の思いの詰まった月日を省みます。あの日、私たちは
「一生に一度も出会えないような体験（時の建設準備室・太田室長さん）」をして、
「図書館は開館してからが図書館だ（菅原峻氏）」と思ったものです。

田原市図書館建設に至る経緯は、大きな時代の流れを投影しています。2000年
代初頭の田原は、行政改革が叫ばれた頃で、日本中に市町村大合併の嵐が吹いていま
した。行政、市民が「変化は我が事」と感じていました。でも旧田原町では市政に移
行したいのに、文化拠点が脆弱でした。行政職員、議員、識者たちの危機感もあつた
と思います。阪神淡路大震災が起こり、市民活動が広がって、NPOが各地に生まれ
た時期でした。

膨大な予算計画で行政が動くにも、時には大きな力が必要。田原の図書館建設が成功したのは、市民の声だけでもダメで、行政を共に動かそうという繋ぎ手があったからではないか。田原の場合、この始まりの頃の「行政、議員、識者」に「市民」も加わり、良い繋がりを保っていった事が、その後の20年を導いたと思います。

そして建設成った図書館開館の後、幸い私たちは図書館リーダー（館長）たちにも恵まれました。変化の激しいこの時代、リーダー達はこれを取り込み、企画展示（「再発見！鳥羽⇄伊良湖フェリー展」など）、高齢者福祉の一端を担う「元気はいたつ便」訪問サービスの開始、「行政・議会支援サービス」の充実、地域資料のオープンデーター化など、意欲的な取り組みを続けています。図書館のまちへの貢献はとても大きいのです。

私達フレンズがNPO法人化を必要としたのは「リサイクル・ブック・オフィス（RBO）事業」を軌道に乗せるためでした。そして始めのNPO活動をいつも応援して

くれたのはロータリークラブさんでした。感謝申し上げます。NPO法人たはら広場は、それらの実績を基に事業を継続し、図書館と協働でボランティアの新しい仕組み『田原市図書館サポーターズ・おおきなかぶ』を、10年前に作る事ができました。ゆるやかな関係の継続が、田原の市民活動の大きな宝です。そして、すぐそばに刺激と知恵〓情報を与えてくれる図書館があることを、いつも感謝しています。

2023年6月

図書館フレンズ田原 事務局 小澤美穂子

(特定非営利活動法人たはら広場・副代表理事)

参考文献

是住久美子「図書館フレンズ田原の視点による協働での図書館づくり」(青柳英治「市民とつくる図書館・参加と協働の視点から」より)

図書館フレンズ田原「活動記録集」 1998年～2005年

中日新聞

東愛知新聞

東日新聞

協力

田原市図書館



出版 田原ロータリークラブ
編集 a o もの
協力 田原市図書館
協賛 まちづくり会社 株式会社あつまるタウン田原
発行 2023年6月